

武江集表

三



武江年表卷之三

延宝元年癸丑

九月廿一日改元

外崎弘福寺宝剣

軍山後牛
権所あり

翌年子丑年決半造當成○浅草二道

舊表始○九月十七日後友九代移系率

七十才

○十月廿二日連舟所里村玄祥率○十一月廿金地院五山十刹結

山熱福子令あふ○十一月廿坊上寺大澤成

谷所常味
とまて清ふと云

○十一月廿日所桐石丹彦率

六十九方号宗園石所流華乃之祖
あり宗所字林彦小義行

○勅之帝其居ふ大々額

記天王
推至

を上り市續担を具行

元祖時十所
十に方あり

初舞臺形を奉り
始て荒りてあり

同二年

甲寅

二月廣本大田寺十五重再建○二月廿六日夜帳書き計の雲
東より西に概引空中橋を渡りし也

○八月丙午保八幡之内時の鐘を切りし引きおぼしき持と
成り○三月朔日金瑞雲寺の経巻を建徳興に贈りて
を収む○五ヶ所○松尾東光寺今年難儀し風雨
淫川を度し結ひて恒に芭蕉一橋を栽世に芭蕉
居といふ

○十月七日持世探幽法中卒

七十二才三田大を著し墓碑あり
おまの内建徳寺に所之といふ

○同廿二日三宅宗海堂卒

名正三宅能成なり
第自持院小卒

延宝二年

四月間

壬午天下飢饉金庫を棄てて旅氏を振給ふ

○二月六日古等より往卒○二月廿二日金持新地に入る

○三月十四日古等より往卒

六十歳五十八歳と号
系より久あり

○九月本枕町山村長を更さる居て始て男我續ねを興行せ
び時の名歌集閑芸を我といひ梅の小奇歌集の始小曲集二年未長室町辰の時
高の奥の奥の奥とて増さる一時高屋を更村山又たろふ終りて雲のちろふ
男女交りて男我續ねを始しけるといふ
さしに奇歌集の我續ねを更にすなり

同二年 丙辰

七月十四日風の雲東洪あり○九月鉄炮海難地より宝子より
能興行 一幸小春 年のろろ雨降○八月十七日儒医神宮之行京師

押谷小卒

名正芭蕉号静軒本朝
聖事を講ずるの始と云

○九月廿二日夜刻増しより宝子より火

持るる宝子より火を看るるの或は俗といふ或は俗といふ不見る
あり又た足跡より欠損して庚辰の中を以て拾ひ獲るることを

接てりとの如く以上江七度 ○十一月七日暮六時時東京江戸

町二丁目より火火くくお水風烈くく一廊焼亡此火廊焼か
て本所中の火よりて始る以時夜十二人焼死に其後の後始て焼く
二名は其の脇を逃げ家ありく高きす

○十二月廿六日江戸火災あるく一和洋合運あり未詳

延宝八年 丁巳 十二月望

己月八日下谷池のく横田七市右衛門ありき事を要ひて難司
官鬼子母神を祈りて一其男小村坪方出小畑町三又川ありて
今日鬼子母神像を感得は後七市右衛門妻男子をけり製奉
此像を本所奉佛より安き事と○七月月中旬より江戸中町へ踊
りあり災難を以て一河制村あり此案の一本は延宝己の年のせ
踊りあり老お踊りあり

○八月六日大風雨本境町甚き雨く雪上る

○江戸省板紙七巻 ○本朝改元考二冊刊行 重加編

同六年 戊午

河原上人吳澤村澤真くわんざう九品佛具奉 ○東海道驛宿五冊持

他者来詳 ○寺舞妓芝居元江代目市村竹之丞きげい芝居の巻あるくあやう

貌り災難ありく一ありて無常を悟り菩提の門入り今年

廿五才迄最年のりきよあつしん富満ふみん終るく一初行法師とあり相をとり

少く一舞納の目別まひなま終るく一舞者より首を脊おひ諸公殿けり

ある後小寺所五ツ目自性院を再興一常行念佛を修めて世に

非の樂寄てんしとのく享保三年 ○十月六日猪熊を京時改年二十七年

○同月八日古等二代り榮年七十二

同七年 己未

夏大為大川筋に外あり

○十一月二日浪人平井権八田川に於て刑せしむ。浪人の初め西本多に
いふに但し一舟乗妓
の怨念小幡陸境の長き船を九廻て廻りしを以て同一船に
あふ人ありと云ふ傳ひを以てのりあてて權八よりある

○十二月十二日連舟所里村昌通車 六十才

延宝八年 庚申 八月

正月八日落木春翔率

北葉坊持次と号し大河の岸をあらめて海賊を捕し
うろ人あり言中ぬ林を小石川柳町祥雲と云ふ茶あり

并海客江戸名所
國令より要し

○二月十日朝五半時より半時迄近園夜の如し ○末岡情量

某所江戸より冥帳 ○二月無地を頼ち清雪再建減る

西本頼ち今年四
地より無地より

て二月半を建ちありし中或は小元よりある本所より江戸唐土後築地へ入りて
南河本所を建ちしより一實文二年の江戸名所記より元より江戸は時時て建ちしあり
周知云々大坂町を荒町と唱ふるより江戸は昔ながら頼ち清雪町二丁目のもたれ
ありし以て橋の元を高いし家多しありし市也と唱へしとある

○四月初月掃帚おりの如のごとく ○五月林某春務率 六十才

○六月廿九日俳人松江惟舟率 七十才 名重頼
俗稱大空寺海 ○八月廿八日芝如來

立智如來の大佛入仏供あり 再建
あり ○八月六日大凡為深川本所

浪町靈巖寺族船跡八丁堀海上瀝りして水を損し人溺るあり

橋損し往来止る谷中法忍寺本堂梁朽まで半傾く おろく
のちろくを助く

東海屋筋新に浩波ありて民家を隔る

○十月晦日酉の刻より坤の方へ度サ二尺版長廿五版あり

自守ありし根の星を長空星といふ十二月より正月

○技藝拾葉集後 三十三巻

世年間記事

永代江戸八幡宮の江戸を馳まて多病の客も稀ありし大坂
のころはより多病二二町のうち酒肆茶亭をたぐり服色を女を

試以別處承代
古六時之義是

朽灰底漆が海蔵の
るを虫くる糸紙なり

卷五

5

ふの焼ありてなまそうけてらるゝ定宝元年
八月に堺町よりベラバウと名つけゝ吳入

八丁堀の松屋せんべい日本橋又一番子
 妙屋うちりめ

あめ

とくありけり云々

桑小江々々やへ室町丁目ふして東家の肴板尉と
焼の本隅今ふ残りて商家の軒の上よりあり

浅茅山古作程考の恒持系

卷之六

年の

子文七
尺五寸

用推策
不為

七

必宝八年様乃甘る西の内務大臣様巻の

ハトハ夢ニキリ思ヒ壽昌ヲ補蓋シ

分乃六一五

ありあるせう

うたふ徳を

新井田系不
此家下在
新井田丁^{年天非}
^{の个}村松町^{節遠内又}
新石町二丁目

とんぶく町
田外

丁燮
責

上野清
門外入

東廠出入子午天祚門左池子

源より車道あり池の端通流地あり
井田より上の門を西側より入

今の井田旅籠町令澤町迄一四ノ加州程也

今之田、引く勢、後中引たい事、一引して、毎五羅中、き程あり、
 今之田、引く勢、後中引たい事、一引して、毎五羅中、き程あり、

一う後まゝ町ありて今沢町といふ加藤彦
平卿あり一西面ありとづるありて一
今の島平橋を飯橋とあるは

今の英町の西本多州慶藩邸あり
今の堀田家の西堀田對忍

後古藩邸あり 支國檣際今の同朋町濱新地の永極木沼とあり

新古桺橋をくまの橋を南の方へとて矢の道爲之をさけり

清船の事初五船發、通りとて、東のく横堀あり、今の東、西、横

と元書所の橋とあり、又必橋南の方川中、小唐船と記して一艘の大

香葉のむり之は葉
 一本六けんどんの香

本阿蘇店
のわきあり

白金

瑞雲の境内小蓮葉の形しる物ありはよりその水の湧けを畫

あうき井町光徳寺小幡庵あり赤坂氷川社根津捨魂社と云ふ

龜戸天満宮同残燈之
深川

延平處丁後方乃丁後方乃所新平處丁後方乃丁後方乃新平

島津氏系譜中 侯后郎あり 永代傳八世 文海ふさふさあり

吳農古塲六並不入海之永代時不對其

二月五日戊午之刻 上苑金麟別馬識金之信持法平
亮安完墓 九月院家之成

○月蓬上人曰百事忌法苑珠林 ○十月廿九日忌法苑珠林

[Handwritten signature]

收書○二月廿一日錄入
升書書
 石字周定中筆
七

佛阿彌像を安置し寛永十二年
と彫る 青森本願寺の同本ありと大坂

うろろ ○十二月五日江戸焼

合意外 方南未洋

○より作新抄諸撰行

母成連元 飛或鳥丸

先廣くは飛と云ふ傳説を妻の以の編とて今年正行せり云々

○紫の一本写本成

戸田義勝作

紫年間記事

あては 安宅丸の御船を解せしれ

一時安宅丸河を走りしに船を被

大船を走らし一川の東岸の地へ移させしる

○大船形船を造る

ヤマト 東宝丸

廣景橋 大船始之

井田市丸

井田一 熊一丸 夜夜丸 春一丸

山市丸

日本橋の船之屋敷 八万石一萬石

分て大船ありしに船橋船の足は案の一本江戸

ゆき拾遺集あり

事跡合考云天和の江小田江市市といふの徳人の合謀を傳り奪ひ元或人をも殺しけり云々

○使客源見十五里遠流を後十八年を懸て室中泊しを許さる

○千川上水ありしに安宅天和の江あり

一板橋の西の方練るの事

のうそ井の池の方より千川に流るるに柳葉船ありき

流を千川上ありしに享保七年より止あり又同一千川内流

川のあり流を業平橋船ありしに又千川中ふれりしを白堀上あり

といふ是も享保中流るるに上ありの川船今も業平橋の東水の方

の橋際より葛西郡世継村の方へ通りて小川一流あり是れと白

堀上ありの船あり

以上事跡 合考あり

○井田永安町の地へ作新抄諸撰行

天和中作新抄ありしに谷へ引けりし跡町ありしに永安町と云ふ

町ありしに松平下総屋敷ありしに後室水の江町ありしに皆川

町ありしに松平町代地の所も元禄以来ありしに田原松平屋敷あり

中記ありありしなり ○古の江土佐郡海より流るる

○天祐井 濟字子德 號人曰新 抱入一函一紙一書一

曉云公擬用母水一試

○此の一本は日本橋一丁目橋本屋敷町より発見、助成

[illegible]

陳、安慶縣陂田町の董處の溫院云、こゝより當時の土中、地中

个一○此以中一與^レ比^レ丘^レ冠^レの周^レ邪^レ田^レ爲^レ之^レ所^レ爲^レ也^レ

廣方縣志卷之五
 藝文志
 詩
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

受の授け
授けつゝ
授けられしを
授けられたる

— 205 —

○此時代は雲霞山の手書である
一幸小村々より雲山へ飛渡し張子の度ふ
付三子と号し松衣社の坊主ありかゝる歌の

雲を細川、水城を、池水之三、又細川、城を、佐々木、又、之を、爲、又、之、の、長、安、
 後、一、雲、入、金、城、聖、山、の、如、く、雲、又、は、雲、一、海、入、之、海、龍、院、を、口、授、之、號、

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some faint smudges and discoloration, characteristic of old paper. The left edge of the page is bound into the book's spine, showing the inner hinge and the dark cover material. The overall tone is warm and slightly yellowed.

改元ありて皇統承應元年の壬元福豆を以て方赤の友とこれと云ふの事ハ不聞

[illegible]

一門人立ふ者あり。廣派も、は一人と云ふ。ハ二老畧傳にあり。卷く六雲山廣派の二老あり。又世壽八十四の年、死す。

(池乃瑞源) 瑞源の了翁齋六羽衣の意あり、細く私書す本條一試
 瑞源を裏付せし人のを綴綴一飛行を修めし人のを綴綴一試

年小五、六歳に燈籠を燈せし一摘痛やをもちて小童即把其首與後ろの崖山如
徐師より某法を授け、蛇と平金を以て之の瘡の内に入り、死す。一擧げ

く物袋圖と号し煖かふ山の極東を衣する義行は二名の市店をひきこみ

[illegible][illegible]

三月の一日、或人又曰、若破る母人、小出来、あるまじき科、此科、小出来、
 月、此小出来、此科、何ぞ、天小出来、と問、答、數回、小く、互、小出来、と、互、と、

庚午元年甲子 二月廿一日改元

一月晦日復經會處 ○ 元二天降七月辛卯

○知良院を湯島へ移しあふ舊地へ移田のふあふ

○弘法大師八百五十年忌○己月廿日古等二代り社率己十

○東福寺七仏薬師下宿より麻布某堂へ移す

○九月廿二日宮医忌本玄琳率麻布祥雲寺○九月大風家屋を

倒す○十二月團圓忌やまのきん保井善哲天久蔵小三良

○甲子江戸鑑刊行松金家板或鑑板行の始といふ

○東世改唐領行個宣昭唐を改めふ

貞享二年乙巳

二月廿二日流星東南より西へ流し先般百里を照し勢

有て空に響あり雷の如し○某二田魚籃観音開帳後井を

○五月修四子福恩寺某所如來冥像この

の像あり

小造なる

○日暮里院傍に神社造営○六月廣常寺智光院別

○十一月靈山寺再檀林と改め改唐系あり元禄

○同三年丙寅二月

正月一日古等に世り周年○國之月利根川を武蔵と

とある中総と定めひ葛飾郡二ヶ所小三

○己月服忌令出改元禄三年八月

○九月品川御殿改○九月小石川白山持現家乳始

○九月大小神祇組と号し

○九月大小神祇組と号し

同三年丁卯

○好古目錄云 婦女の著く用るやうる并ハ貞享年より河内子所りの
後のちより一めて工人小形こがた一む後終ふ十数年より宇内うしの
まのりよりとあり

元禄元年 戊辰 九月晦日改元

武江幕府創の地ハ元の如く武士が町屋をうへる幕府の地
は附より幕の西へ臨みうへる幕府を幕府と改め
幕府の西へ載る幕府を吉川氏のおとしで幕府と改め

○九月神田明神祭神樂結お始まる 河内内へ入る

○十月二日儒所西山健甫率 名賢番板本
養正院小華

○十月十八日連舟所里村昌程率 ○十一月神田橋河内外小形
を福江より河内所となり乙亥年より改て飛波山後持院元
寺と号し
は飛波山より移り此寺に遷すは同八年
遷すより一移り此寺に遷すは同八年

同二年 己巳 正月

正月十二日儒所今井弘政率 号魯齋率に
再移す小華に

○正月十六日江日老人星現しんげん現 老人星の現あり
福江より移るの甲ありとあり

○五月十六日雨天二十三日雪より降る家の福江渡を駕り
子二百人を封く江戸の天下と改め

○十月婚こん姻の時のありせし河内村あり

○十月廿五日夜異星異の方あり ○十二月山村重吟翁著
湖才書 戸部寺方の始あり同七年法令小叙と

○江戸圖鑑總目板行 画工名川流宣徳之
編目一校率一冊 ○再訂江戸熱風板七冊 十二月
編目一校率一冊

同三年 庚午

二月虎市門外より町より改め大工町より元材本町と改め

ひろこうち 廣瀬とある長崎町の廣瀬を築 長崎町の廣瀬とある長崎町と 鉄炮

海濱地海を子屋宅を建 火災の時の めあうとそ

○四月十五日不忠池を築 かんきふ まんさん 築店小室無上人春日念佛金満教乃信

群集一十念を交ふ書の名号をくふ事數一

○五月廿五日威重寺 今天 大六佛建立之教と未詳

○十月庚子日列南信法院と成 ○築小室文集成 百廿卷

○十二月十七日金鰲工模谷宗与終 ○東海と云間終と梓乃

○十二月廿二日昌平坂大聖殿上棟 是まで終る事あり 今年この西より一由

まをる下機 菱川匠宣等 この西の坂を 昌平坂と改る

元禄巳年 辛未 八月

正月陽島丹大聖殿清浄成 上建よりうらふ地は已まへ林敷の持あり 了協ありあり一と改交終る事十語乃

郭を築くを七十二段并光福の像ハ画工持於洞雲を画く二月小正にあり 二月

因十一日秋奠ありて清町ハは府重宝の地度より一六今の西代地をあらて極と おし橋を 古名 昌平橋と改る

頌大成殿新落 芝山

登、昌平坂我、士山東斯度斯經始、倏忽成廟宮楹功

依勝地莊觀聳清穹畫棟麗輪真麟甍真玲瓏四配平床

下雍容珠箔中三才抵太極六經定折衷禮樂享雅飾文

教克磨礱山知仁有樂川盼道罔窮時否欲浮海栖、歸

魯門豐祀誠如在吉蠲捧芳樽神明永降監國祚齊乾坤

春入舞雩節化雨澤黎元

○四月麻疹流行 ○同九月館人一柳軒不卜年 本西法也 寺子年

○同十月館人福田為云年 ○四月牌文谷法苑寺前中威感

市谷自院院法苑寺前田派をあらて天衣宗となりて七月日蓮宗

^ハ徳田派の縮減を請ふ一疏也。○今川橋を不入流と塔割

○六月十八日 紀伊根来^ね河山^{どろ}賞^{ちやう}鏡上人^{かうじん}来^き幸^{しやう}九^く而^に廿^に年^{ねん}志^し因^{いん}矣^や

大正十三年七月二十日 信濃縣井ノ口養蚕會より 謹啓

臨城子 ○八月陽晴雲散水清波
蘇軾 蘇軾

○十一月十九日恭人清水初四年

○義廉爲世大教化之造_り雨の金洞_の徳の大地_の實_の爲

服東大江衣刺衣
 古院馬林源記
 都議事記

○體 憂 於 未 辰 之 肋 痿 滿 不 能 行 也
其元氣衰 痿之肋 亦中其毒
其毒如 痿之肋 亦中其毒

[illegible]

一、政治的に於けるもの
 一、経済的に於けるもの
 一、社会的に於けるもの
 一、文化的に於けるもの
 一、宗教的に於けるもの
 一、教育的に於けるもの
 一、科学的に於けるもの
 一、艺术的に於けるもの
 一、哲学的に於けるもの
 一、文学的に於けるもの
 一、歴史学的に於けるもの
 一、地理学的に於けるもの
 一、天文学に於けるもの
 一、地質学に於けるもの
 一、生物学的に於けるもの
 一、医学に於けるもの
 一、農学に於けるもの
 一、工学に於けるもの
 一、建築学に於けるもの
 一、造船学に於けるもの
 一、航空学に於けるもの
 一、宇宙学に於けるもの
 一、天文学に於けるもの
 一、地質学に於けるもの
 一、生物学的に於けるもの
 一、医学に於けるもの
 一、農学に於けるもの
 一、工学に於けるもの
 一、建築学に於けるもの
 一、造船学に於けるもの
 一、航空学に於けるもの
 一、宇宙学に於けるもの

[Faint handwritten notes at the bottom of the page]

元禄九年壬申

五月元日未申の時日
 辰七^半 ○漢字の韻字の音の意

○大樞獲奇沈堂所建三○六月五日○信州張孝子書

如來圓阿院より寂然
幸田翁孝文卿子息二人の後
以て寂然居士付託ありしを

八、諸葛孔明之保赤忠宜父母之懷小孫余亦未嘗不有

此の頃の機向を一寸せんが。

[Faint handwritten Japanese text]

2000

(九月) 濠洲川流宿町より聖天町まで叡生林跡のふたを

同治六年癸酉

名去福祿令平
弱遠童光古小異

世上小疾病行ふ事を告ぐるものと、の妖云なうげん一般の噂とありてこそ、
を除く某法の書物を梓行せしうかり此妖云を言ふてせし者
ともを刑せしものなりと云ふ

○六月廿八日 館所之角ニ圍社造ふもの句を吟む

奇跡考
卷一

祀を引てまゝ一天下昇黷ありて田面をあらへて其角を乞の句を
傳へ須臾なりて為障るといふり此等京商社并傳へてあり

五幸の冬、源川大橋あるをうりけるとき、「初雪やうけりける」

楊の上芭蕉 同——楊成り——肘

○分其五曰中角之文據本東明率

二本板上行
古本義走

「わうと云ひてひて落協の要求
華送の協わく」「一強より強も
此の案も然る案りる」
圭角

二月八日狩於洞雲益信率

上肢體至
腕不葬

○二月廿九日永川東門外燒矢

玄明再
建あり

○六月陽清靈雲と冥心即真之課の本と成る

○六月廿六日杉山檢校信一齋

八十餘方
孫勒古子墓并

○七月溪系大獲院不_亦妙

八情實を勸誘せしめる

中 孝子を會して作れあり
と云ふ文殊は、川蜀の事あり

○八月心覺山月桂寺千剎不列在

○八月己丑小塘改尹率

七十方号靈雲稱擔士而臺州族次男也
系乃小松末子 源川海全子并葬焉

○深川宜雲古寔剣

世云一慄
寺あり

○高田穴八幡宮社地不承室明神

を勅請也 ○江戸名所語板行七卷

○増上寺二世貞養上人、大悟心、不但是より、代々大悟心あり。

○十月七日奧澤村淳吉子家基所願上人寂

七十七

○十二月十二日水府度偏信平使豐榮率

大德在初之象 師九，或

敬啟者
 茲將本館所藏之書

宅地之國信
○周運上陸定○九月八日亥時大瑞不吉

大坂川、在豐後縣中、其水西流、經平野、入平野川、

安治川も此時成より○五月小石川河段法造営

○六月九日医師板垣宗機卒 成業舎主 ○七月儒師園井碧菴

卒 名恭号と東泉一 ○七月保川海一万坪を築き 海傍と号

○七月廿二日新堀白令河段まで築く

○八月新自永代橋今日より通車成る

○八月東叡山根本中里文殊橋二重門并山王社 今の西 河建立

廿八月神堂入佛あり 九月三日信長五日より商人多請を司るる河段のそ緒一時不福騷一山内苑を司るの地もあり一と商人門前の町をひくた廣小形とせしむるこの時より平永町八軒町新町車坂町のうち新小柳町五門町永元拂せし新田と西の窪へ代地をぬき

南郭文集 東叡山瑠璃殿

一旦経営結構新 入門何處避紅塵 玉樓金殿高多少

不庇貧民七尺身

○九月六日段橋殿の勅額刻記あり 以勅額六持段院基勝に書あり一町和後川中半の堅橋の丈尺ありも遠ひあく

置りて三重の橋を竹木を以て造り橋より西に橋板を打ち白紙を以て文字を施し紙を以て能くとのひつるを清書して

敷置木橋入等ありて後彫刻一漆塗端を施金具を備へて東叡殿の前木橋を車馬車下りせしむ

○同日己刻に新橋南端町より火出風烈しく大石路通町筋

新田下谷上野迄本橋流系山谷千段掃部宿あり 此は流系

世二万半焼あり元禄十に年より源川不建新寺在河段橋より

河段八万の道幅十五万と成る○二時源河神社坂本あり一と東叡

山中寺あり本橋流系河段町へ移る○十二月十日本石町式丁同より

火出日本橋靈巖橋八丁段橋流系河段町へ移る日本橋焼あり

人多く死す○十二月画工の夜潮潮漏せし 但十六日辰辰町二丁目新乃木町一時あり

○十二月廿二日儒師本町明庵卒 名貞幹號年と元千束村小森と

光緒十二年 己卯 九月

五國橫山町震災の被害去年災援会第二回西門跡。其由也。

冠(福主)一乃(風)之(山)來(之)也(意)保(之)始(實)事(也)

矢の店蔵の海、町屋、床、語、とある大なる米屋町と成る云々
 又、其の海、町屋、床、語、とある大なる米屋町と成る云々

[illegible]

臣丁夜夢有一人語及諸君志士之困窮者一語人亦驚之夢中又

の主要研究は、毛名櫛を元櫛櫛として示すことである。櫛櫛は、櫛櫛

掃之より雨にやて故に掃くの節に於て一更に故に之を掃ふ今又家の掃く

正子所産は、貴方所産の毒の如き人、満ち、是等の毒の所、所産の満ち、
 又種の子を、おとす、くば、後、其の毒を、引、き、て、その毒を、おとす、は、其の毒を、おとす、

尤も今不肖にして瑞河家の名を辱るゝ又今又此を瑞河の宅を襲へて其席の

[illegible]

○二月廿八日 天祐生庚戌年正月廿八日 ○己卯己酉己丑己未己亥

[illegible]

東洋の事蹟を以て其の源を究むるに於て

○八月十九日大風○九月六日川村隨見率

國立中央圖書館

二月下詔車坂之役大破焉因出爲不韋之將以燒之

○復國古史城州誤源清淨釋迦如來室快

一、日越六斗目の酒をいふは昔江戶屋の酒帳よりとる

[illegible]

○永代將樂地六萬坪減○八月十七日三萬高阪嫁村父親書

光緒二十二年國史館修○溪州懷安縣分司司馬

本國產之材料，如木材、紙張、棉布等，均應盡量利用，以減少進口。

本由圖經元已始於地經，(大)三才圖會所載，

○此書長三冊 字體長多之至 形亦大 無他 亦頗奇也

同治十年 辛巳

元月元日外展朝日映室○或祀云水代楊曰迎夫何何事

市屋敷ありし今午二月元日玄冥ノ何の辰とも知れず如の首級あり人々驚きし事果首ノ人の頭を得る事武門の祥瑞ありとて是をまつり堅牢地神ノ崇む世人遷てあらん後ハ何のりぬきる尾の社ありと云ふし今も永代橋の側ハ小祠あり

○二月十九日古第五代り抵率五十七○二月天海宮八百奉

法忌東来亦國小付毎戸社小於て詩寄連俳興あり

又元集 今午角の句

松林やあつむる年ハ八百

寂帳そと院

○三月十日日浅野家吉良家事あり一日之世人の

知る事ありて後ハ贅せし○三月麻布御殿初てあま

○二十三間重深川不修建立

元集 新二十三年

若きやきのハの集見ハ未縁賣 今午

○深川海邊寺おとさき

吉祥寺軍劔并才天を安並に

軍基知見院 隆光信正

○肌腫きん不し門て本新法悉くあし非人小庭を建し

○十二月和人冬長谷川安清番具在後徳の三人ノ高ハ

御免あり

元禄十五年壬午 八月宣

二月十一日山谷庵町よりあ火青山麻布を焚き浦品川よりあ

火の時麻布御殿品川御殿あ火す立寄橋二五門焼亡

品川御殿 再建

あ一姉玉子の儀也

○二月十五日日本橋の上より傍系杭をさる

○又より葛西飯塚村夕ゆふ親世名江戸系近江より系防置

集する事騒一村長の家より愛想の茶とておけ外知あり

とて法人とてを求む

又江戸町とのち院へも五七日あて 狂信せういさ地なるふれを村内のおと

○天満宮八百奉御忌 西行上人五百奉忌宮夜法師二百奉忌

○二月三日田舎稲荷靈告板の檀より靈泉をかり眼疾を癒するの法をて驗あり 水いありのゑい げんみ

○六月廿七日湯涌靈雲寺雲山津巖和尚賞彦比丘寂 世嘉六十二とりの

○寺崎村百姓傳方妻つる娘辻地の叢中より不動尊の像を得る 此田舎貞妙居士の筆の中より得らるる一尊なり

○貞徳翁五十年忌 正月十八日懐四の心を 革解も花より花のむすじ とも角

元禄十六年 癸未

二月に日淺時家に十七士自刃す家甚しく葬に

新井子甚悦完形 冬雪の身はむらうりあか 子葉原終小 柳てのむ葉
あふ死あひ山 二もともふら南地あり我我秘書表す事と記するのありし月
名の

東海監修 東地紀傳 介不記 追かぬ記 介海記
新撰大石記 権花集 東地建屋記 改訂後記 易水建屋記
義人録 忠士傳記 山科の改書 忠義碑文
楠不端 瑞光院記 義士考 義士傳 義士絶結
蓮雲記 瑞光院記 義士文通
春屋東地紀傳 繪本忠臣傳 東地建屋記 柳てのむ葉

○二月九日儒師松田晩翠卒 萬全齋松田氏

○小柄系日慶も再興 ○三月麻布赤坂の焼亡

○四月廿一日石川波中なる飯の屋提川ゆき子孫孫士才を源川

世にる事ふ矢殺を射る 十一中と射る事ふ事なる 萬全齋松田氏
若殿事ふひひく又而後を射る 萬全齋松田氏
而る悲福をぬく 萬全齋松田氏

○五月廿五日久保天徳の門におる長崎の妻二人の男ふとせむ

元祿の姫山檢校信都は多年才天の靈験を得て針師の術を

得奉ふ一丁目土地をひ一に地へ年才天の社を営む今小針

持ハナ○雜司の鬼子母神系諸群集する事始る信都人等社を再

建ハナ○白令賞材を宗刻如後述心刻群玉の連枝を連る事あり一は紀後述

○湯涌小百標山風園を宗刻本ゆき宗や成りす八山宗基と隣目地土人と号

○江戸麻子江戸宗燈おふ載る世時代の名取名物大恩を方子

参る

△儒者八代海江村玄院主常 筋達橋内人良友元同玄龜林源三郎坂井伯元

同伯隆彦新町本下坂宿溪系澤田伯宗 系橋保屋喜左大徳寺町三丁目山

完元八代海江村孝彦喜貞 辻春彦 △外道系橋吉川惟良 渡府熱社宮

△寺跡 忌之方馬 西久保佐々木万代市 中村立長 △古澤園利 本下坂宿新島

山下丁工呷南小田系町橋子 西久保丁同調和停勢丁下下幸入同町角西而系

町安石町三丁目虎雲南信馬町嘉言 停勢町一品市町三丁目立志石所多清町治徳

△給所系町野鹿洞雲益信 新橋多市町野鹿養朴常信 おが町野野永叙之信 同丁野

野鹿系町信 新治橋野鹿探信寺政同野鹿探雲寺重 外田市町野鹿方信 昌信

野鹿系町信 同外記秀信 本坂町三丁目野鹿探雲寺重 同野鹿探雲寺重 同野鹿探雲寺重

野鹿系町信 同外記秀信 本坂町三丁目野鹿探雲寺重 同野鹿探雲寺重 同野鹿探雲寺重

△浮世橋 橋町菱川右玄清 同右方馬 古山左市系石川停方馬 杉村治云系

△浮世橋 橋町菱川右玄清 同右方馬 古山左市系石川停方馬 杉村治云系

△浮世橋 橋町菱川右玄清 同右方馬 古山左市系石川停方馬 杉村治云系

△浮世橋 橋町菱川右玄清 同右方馬 古山左市系石川停方馬 杉村治云系

△浮世橋 橋町菱川右玄清 同右方馬 古山左市系石川停方馬 杉村治云系

△浮世橋 橋町菱川右玄清 同右方馬 古山左市系石川停方馬 杉村治云系

△浮世橋 橋町菱川右玄清 同右方馬 古山左市系石川停方馬 杉村治云系

△浮世橋 橋町菱川右玄清 同右方馬 古山左市系石川停方馬 杉村治云系

村松町を筋遠山内

庄門の跡を連ね
町の四世の例

ありて有店と記せり

村松町八事
係の事あり

尚この所
あり

昔の志ある橋と今の如くありぬ橋とあり志ある橋の如く今

のまゝ小細町を丁目の先の橋を志る記せり今の山下庄門を介

ひびきあり

同十二年の馬場の鴻鳴橋とあり
又庄門を背へ坂庄門とあり

上野清の親善堂に今の橋

ありぬ橋とあり大塚後志の門前田圃あり

○三國橋筋は内ふ一丈の狹り側の家屋は壊れぬと云ふ所のりの藁子かきと云ふとき
鳴るときは狹りしを志るなり 不橋筋や狹りしを志るなり

宝永元年 甲申 三月晦日改元

二月廿七日地震は月まで交り震ふ

○あま橋と新大橋のりす道を行く

去年の大火よりあま橋より
人多く死せるゆへなり

○三月年号改元あり一祥吟

宝永の給下りをも是の事

冠里云

○五月二日本国流る所元祖本國親伝率

十日向本流る
所集り

○六月十五日より七月朔日二日江戸を出入る大川筋を志る八月

は日より山ありて中総橋より股ある押し崩し田圃を志る

く死入敷を志るは事所江戸流る山ありて中総橋より

○六月廿二日小塚改元率

宝永元年二月廿二日
書を志るは

○七月廿五日より九月朔日まで復興する不熟より土佐山文

善護園張あり○八月館人より昇る志率

四十八才二世
の志あり

○九月神田明神社流る志あり

○十一月聖堂流る再建改元五日迄元

○今年あま橋筋は江戸より改元世の見せを
志るありしを志るなり

同 二年 乙酉 四月

二月廿四日院文按州吳張之某昨如來客帳

○同月、復坐舟、指吳淞、以安、乃歸世書（己卯）

同雲張○日月之行如流水之流如生焉無才天書必錄

觀世音菩薩 功德無量 山王廟 寶號 ○ 九月 望月 廣濟

○六月廿九日由村書院寫畢

二十天迄も、其の如きは、猶も満ち

此乃神龍之跡

[illegible]

○同奉新法慈之文家本國之秋並家定張

○月永作吉文治改日聲明并安張

○今事修舉家庶民之無病者

後集卷之五
 後集卷之五

是に月上の如く洛中洛外童男童女七八才と云ふに近きものなりと思ふを謂せに按
 ずるを以てて一歳股^ハ童^ニ樂^ニ、此^ハやゆふより歳内一時子のひまを以てて法
 規^ハを如く妻を從僕^ニとせしむるを以てて如きかゝる事情も假勢漸に世に遺棄^ス
 せしむるを以てて一歳股^ハ童^ニ樂^ニ、凡そ此の男女一歳二歳を以てて法を以てて

[illegible]

○七月十五日寅刻我國來信

長壽院之長次所

○十一月己酉朔刻之于武庫後橋非浪橋のり田水町寺

二町計、近來方萬八千餘、曉矣、望、土、日、已、到、大、物、

~~Handwritten text, likely a signature or name, written upside down.~~

寶永三年 丙戌

正月二日儒師柳系玄輔卒

名希綱号管海翁小名希
鏡河柳田重子子希也

○正月十日秋子刻赤田須田町より火入して前邊見附土手町

赤田町より赤田町通り小幡町河津町大門より長谷川町和

泉町河津町辺赤大坂町赤材木町より火入して堀小幡町より翌十九日

辰刻終る○正月十八日圓向院より火入して堀小幡町より翌十九日

せー紫井十年忌吊法事あり○二月廿日夜亥刻赤田須田町より

火入赤田町より火入二町解焼亡と

○二月十日梨子の赤田勝卒

戸田氏名希光号希光勝氏赤田勝氏令孫子
葉江輝世 号の勝氏より火入され火入と

命のときを
りあふひて

○二月十七日儒師栗山潜卒

名應 称源助
赤田勝氏より火入

○六月元字令吹留あり足を宝字報と

○七月より根津権現社境内の火入再興十月成終り舊地分
り國子坂の新あり○七月廿二日大要救り赤田勝

○八月將時松林懐徳園回極の額金五八幡宮へ掲る

○九月十五日亥子刻大地震○十一月九日医師萩生方菴卒

名
但殊

の火入二田
名松より薪

○屋敷松百穂小極

名松より薪
松屋より

○十一月十六日己刻に谷作町より火入に丁半解焼

○同月廿日夜子刻赤田須田町より火入大坂町河津町より火入町堀

町葺屋町より火入芝居赤田町長谷川町より火入赤田町幅二町長十

五町計り焼亡

同日 丁亥

正月十日河津地赤田勝氏天保正再建あり赤田院と云印金部有

施徳の旨あり○正月十五日申刻浪町新岡町より火事一所の
橋舟才とあり申の火事平天郭の社を元小橋ふり火事一所の

○二月晦日俳人撰本より南率 甲子七才 号宝晋秀
二年後上野より北率

○三月八日大火あり一申正保福小江り 火事
未詳 ○倭城朝熊山處を

流井田向院あり寂然○九月廿二日東叡山観学院より新僧於寂

○七月二日下谷重福より新僧於法平寂 其後の目いふ田舎より
甲子流重福より新僧一人

○八月朔日小石川より火事一所の火事一所の火事一所の

○九月二日徳谷安左衛門率 徳谷安左衛門より火事一所の火事一所の
の園をてゝ火事を

○九月廿七日儒師松浦交翠率 六十才より火事一所の火事一所の
同著書より火事一所の

○十月十二日俳人撰本より南率 九十才より火事一所の火事一所の
一葉散出ひとちる風の

○十一月十六日連舟所里村昌隆率 六十才

○徳國銀れり停止あり

○十一月廿日より富士山の根より火事一所の火事一所の

○十二月廿日より火事一所の火事一所の火事一所の

○十二月廿日より火事一所の火事一所の火事一所の

○十二月廿日より火事一所の火事一所の火事一所の

○十二月廿日より火事一所の火事一所の火事一所の

○十二月廿日より火事一所の火事一所の火事一所の

○十二月廿日より火事一所の火事一所の火事一所の

○十一月廿八日法入王寧宇率 三田小山
大聖寺

宝永六年 戊子 正月

正月元日大馬○正月二日武蔵相模より火事一所の

○二月地より白毛を生じ
○三月秋元彦に岩田彦助といふ人

武員入る那場集村堀集井の田蹟久しと處を失ふ人のを歎き

と標を重傷し碑を建る○四月朔日東人山田宗編率八十廿才 名周子

東本願寺地中長童を不葬に子
○五月山田久能家屋を弱種奉家後と云
○五月郷人芳安一鼎率一虫小室永 三年より云

○五月十又議をめぐりて通用始る
表小室永通室表の婦小水久世利と
あり經一寸二分重一女文字六小田系彦の

巨きて林系満の
○深川の沙門世小地系 寺主 正元金銅の地荒る六軒を造る

と今年より始て江戸と所不安す南品川品川と
○今年より始て江戸と所不安す南品川品川と

寺宝永七年 八月迄 比谷泰字子心徳二辰 九月迄 栗鴨と心子二徳巳年 九月迄 深川靈巖は

享保二五
○同新永代と享保五子 七月迄 〇をとり麻疹流行

○十月廿二日算測の作図新助孝和率号 自中園流祖之 外此は漏ちお華

○後寺原村本地佛親世嘉家帳

○十月十五日深川八幡宮を造営遷宮○十二月二日將野隨川本伝

事記十七才 ○十二月廿二日後殿十代席中率八十二才

○十二月谷中威意と今の 天より の隣ある空々世乃店室小尚齒合あり

此時後辺幸店百廿七才あり上戸あり椅子ふよる妙なる派の

僧二人は常衣僧人素袂袴ありと云々

席の者の古実あると幸店中必振舞は玉渡河之天正十年壬午小水は仕官の比より

の親切あり仕を辭して後役組して唐土といふ天竺阿蒙陀を始と師の法良を失ふ

九十九才の時返朔一室永八年中率 周小云幸店老人の役小八十八才と云々の

と云くは得る事上方ふ八十才と云くは八十のひと書て来ありといふ

宝永六年 己丑

正月十又錢通用止○去年十月廿二日の後より際より正月十一日

夜ふりくみ降る折葉甚 ありあり ○二月臨海河運上り所免

○二月二日より七月二日まで深川八幡宮家帳

○六月宝字報通用よりある

○七月より九月まで回向院より洛東津院迄不動尊宝帳

○九月多賀朝洲序々をゆりたる後英一様と号し休川長崎町

○十二月廿二日能人小澤得入率本報町坊正なり

○後述事店對話記成杉本義隆
編写中

宝永七年 庚寅 八月国

二月上野清和親王の社儀軍約形を移す

○二月二ツ宝銀法改改○三橋大木戸石垣を築せしむ法を

札協定○湯田波守宗創開山本食義寺上人あり享保三年
六月七日

近化九十
才より
○基回向院より稲毛寺作如來宝帳

○三月十九日角田川本母を移す九七百世二年忌大会佛回向

抄る小綴記小綴る貞元元年
より八七百世又年ふあり
○二月より五月ふあり永代より永代より永代より

宝帳變服の法施系於朝々持する後實の親世より又足摩の不動尊

開帳○二月より五月まで深川より寺より菰包の阿彌陀尊より

并波仲の軍陣のより弘子手親世より二月月不動尊より

天寶帳○二月乾金系二ツ宝銀通用始り武集判通用止

○七月十一日寶源寺創立の松雲禪師寂六十二才

○七月より宝八月まで市谷八幡宮境内より於源法編より

宝源寶帳○九月廿一日芝口法門法就よりあり徳人徳成

日法若二丁目より二丁目まで芝口二丁目二丁目と改め

○十月十日亥刻池上本門を焼亡一本小十二日
とあり

○十一月琉球人來聘正徳天皇五子
正徳天皇五子
正徳天皇五子
○武隨寺小今年より

